

佳作

## テーマ3：多様性を認め合う社会をめざして 「緘黙<sup>かんもく</sup>の先の世界へ」

東京都・晃華学園高等学校2年 三浦 結那

今年の夏、私は語学研修としてイギリスの家庭に2週間ホームステイをして、現地の高校に通学した。最終日の教室、なんとか英語での発表を終えてリラックスした私と対照的に、いつもおしゃべりなクラスメートが英語での問いかけに沈黙している。それを見て、私は突然、昔の自分の記憶、ずっと忘れていた小学生時代を思い出した。

「場面緘黙」という言葉を「存じだろうか。場面緘黙」は、正常に話す能力があるのに、学校や職場など特定の状況ではまったく話せなくなってしまう障害だ。原因はさまざまだが、私の場合は、小3の授業中に先生に「鳥のように能なしだ！ 鳥第1号！」とからかわれたことがきっかけだった。教室に行けなくなってしまう私の毎日は、家と学校のカウンセリング室の往復になった。

最初は、恥ずかしさや反抗の気持ちから「学校では話さないぞ」と自分で決めていたところがあつたが、その後、実際に話そうと思っても、家以外の場所ではなぜか声がかすれて出せない。結局それから小4の夏までの1年間以上、私は父母以外の人と話すことができず、家の外では声も出せずに、母の手のひらに指で字を書いて意思を伝えた。

話せないだけの子供は問題行動を起こさないで、それが障害だと気づかれないことがある。しかし、授業で受け答えができないので、学校の成績への悪影響は避けられない。私の場合は学校のサポートを受けてカウンセリング室で勉強を教えてもらい、自分の意思は書いて伝えることができたが、病気ではないのに口がきけないことを信じてもらえずに心ない発言をされることもあり、いっそ本当に病気やけがで声が出ないのだったらいいのにと苦しんだ。

そんな私の転機となったのは、小4の夏休みに両親と行った海外旅行

だった。誰かに話しかけられても、英語が話せない私が受け答えができないのを不審に思う人はいない。そして周りには二度と会うことのない人たちだと思つと、何を話すのも心配なく、旅行中はまるで家の中にいるようにずっと声を出して話すことができた。

子供の私が英語で話せないのは普通のことと気づいた時、不思議なことだが私に突然、「将来は英語を話せるようになるう」という希望が生まれた。そして帰国後は学習塾に通わせてもらい、中学受験の勉強を始めた。学習塾で私よりも口数の少ない子だと思われたはずだが、塾では無言で過ごしても誰にも文句を言われないのだ！ 安心した私は、少しずつ緘黙から抜け出すことができるようになった。

中学校に入ってからには念願だった英語の勉強に打ち込み、スピーチコンテストに出て賞を取ることもできた。中3から高2の今まで、私は生徒会役員として、ステージや会議で発言するような活動もしている。私はこの自分の体験を、場面緘黙で苦しんでいる子供たちとその保護者、そして当時の一言も話さない私をそのまま受け入れてくれた友達と先生に伝えたいと思ひ、この文章を書いている。

私たちの日本では、外国人に見えない人が日本語を話さないと奇異の目で見られてしまう。反対に見かけが異なる人は、話しても分からな人だと思われて疎外されてしまうことがある。しかし本当は、言葉が話せても話せなくても、どんな外見をしていても、相手を一人の人として認めて、可能な方法で寄り添い、コミュニケーションを取る必要があるのだ。

場面緘黙は子供に発症することが多いため、誰にも説明できない苦しみを抱えてしまうケースが多いという。何も訴えず平気そうに見えるても、心の中で苦しんでいる人、昔の私のような子供がいることを、もう私は忘れまい。無言で訴えていた過去の自分に「忘れていてごめんね」と言いながら、いま私は医学の道を志して勉学に励んでいる。